

---

# 二人の鬼姫

ブッチャー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の鬼姫

### 【Nコード】

N0373I

### 【作者名】

ブツチャー

### 【あらすじ】

ある日、一人のホームレスの前に、おっかないけど大層美しい女性が現れました。その女性は、アホ面をしたホームレスに己の命より大切な姫様を預けます。

姫様は預けられたホームレスは、今でさえ不幸なのに、人を超越した者や化け物達に襲われ始め、益々不幸になってしまいました。ですが彼は、どんな事があっても決して負けませんでした。

## 序章 ホームレスの受難

ホームレス。まさか自分になるとは思わなかった

大学受験に失敗し、引きこもって見た俺に通告されたのは父さんのリストラ

それを聞き、母さんは別の男を作って逃亡。

父さんは鬱になってネットゲームに嵌まる

流石に耐え切れなくなって家を飛び出し、派遣社員として寮で働いていたら派遣切り

寮を追い出され、着いた先がこの公園つと

「我ながら凄い転落人生だ」

最近多くなつた独り言を呟き、テントを建てる

時刻は午後七時。季節は秋

めっきり寒くなって来た夜の風を避けるべく、俺はテントの中へと入った

「うっさむ。今日は豚骨味にしようかな」

三人は優に寝られるテントの中、取り置きのカップ麺を取り出し、袋を破る

もう数回しか使えないだろうガスボンベをカセットコンロに装着し、後は公園の水道から水を汲みに行くだけだ

俺は鍋を片手にテントを出る

外は真つ暗で、僅かな電灯の明かりが物悲しい

「……………これからどうしようかねえ」

金はもう底を尽きようとしている。仕事をしようにも身分証が無い

八方塞がり。素敵な言葉だ、まさに今の俺を表している

「ま、何とかなるか」

そう開き直れば明日は明るい。明日には明日の風が吹く今は早く、この飢えた腹を何とかしましょう

「水、水つと」

水道の前に立ち、俺はコックを捻った

ハッハッハッハ

荒い息を漏らし、魔犬が夜の町を走る私を追う

数は三匹。姿こそ普通の中型犬だが、一匹でもライオンを食い殺せ

る獯猛さと、二本の長い牙を持っている

だがそれは良い。問題は魔犬の後を追う男。六角衆が一人、石兎とその部下だ

戦いとなれば一個小隊を率いり、勇猛の名を欲しいままにするこの男が、追っ手として来るとは……

先に来た雑兵どもとは違い石兎と正面からやり合う事は出来ない

否、私だけならばやる。負けはしない

だが今は己の命よりも大切な物を肩に背負っている

「……もうしばしのご辛抱を」

私は肩に担いだボストンバッグをちらりと見て呟いた

「ガウツ！」

私の意識が一瞬、逸らされた知ってか犬の一匹が私の足を目掛け飛び付いて来る

「ちっ！」

苛立ち紛れの舌打ち。足を引いて牙をかわし、そのまま犬の頭を踏み付けた

グチャリ

頭蓋骨と脳が潰れた音。こればかりは何度聞いても慣れる事は無い

「ワン、ワンワン！」

踏み潰すのに体勢を崩した私に、残りの二匹が襲い掛かった

こいつらに手間を取られては、石鬼どもに追い付かれる！

「くっ、畜生どもが！」

使うか？ こんな獣如きに？ いや、獣如きだからこそ時間など掛  
けていられるか！

「我が内に眠る八と三の太刀よ！」

夜の闇に右手を突き出す

「六っ！ 紫雷、子烏丸一刀！！」

右腕に走る激痛。それは紫色の雷を纏った、烏よりも黒き、飾り付  
けの無い太刀を手に取った証

私はそれを、闇夜の空間を鞘に引き抜いた

「ラーメン、ラーメン、小池さ〜ん」

お湯を沸かして、カップに入れて、三分待てば出来上がり

「俺は一分で食うけどね」

もう何回使ったか判らない箸を手に取り、悠久に近いこの一分をただ、じっと待

ビシシっ！

そんな音が聞こえそうな鋭い痛みが、突然全身を走った

「ぐわっ！？ な、なんだ！！」

次に痺れ。まるで雷か何かにか打たれたような感覚だ。いや、実際には打たれた事無いですが？

「い、いやそんな冷静な事を言ってる場合じゃねえ！ な、なんじやこりゃ」

痛みと苦しみで、テント内をゴロゴロとのたうちまわる

「ちくしょ〜これが新型インフルエンザの威力なのか」

保険証は先月切れたし、何て俺は運が悪いんだ

「う〜う〜あちー！！」

ラーメンが零れ、俺の体を犯す

「あち、あつ！？ ぬ、脱げ、脱が、脱がが！」

シャツを破り脱ぎ、テントを飛び出して水道へ駆け寄る

「み、水〜!!」

蛇口を捻って水を被ると、温いながら痛みは薄らいでいった

「ふう……ん？ ……な、なんじゃこりゃ!!」

俺の身体には右肩から左の腰まである、凄まじい傷跡が浮かび上がっていた

これは、おヤクザ様達がサウナで自慢していらっしやった刀傷と言  
う物では？

「な、何故？ ま、まさか寝ている間にホームレスを狩る若者達に  
？」

こんな傷を持っていたら、もうサウナに行けないじゃ無いか！

頭を抱え、悩む俺

その俺の耳に異様な音と声が響いた



## 序章 2

「貴様らに言っても判らぬだろうが……よらば斬るぞ！」

言葉が通じぬ者には覇気を、覇気が通じぬ愚か者には剣を持って応えよう

背に雷の結界を引いた私に、犬どもは左右に別れ横へと回る。

そして私の喉元を狙って躊躇無く飛び付いて来た

「愚か者が！」

右の犬の口に刃を突き刺して、そのまま体を左に崩し、もう一匹の犬の頭へ突き刺した犬ごと刀を振り下ろす

振り下ろした刀は、二匹の犬を真っ二つに切り、返り血を全てを飲み込んだのち、黒い光を発しながら闇に溶けた

「……ふむ、流石は鬼狩り姫。犬では足も止められませんな」

突如響く高い位置からの声。犬や雑魚どもとは桁違いの殺気

「……………そこか！」

足を止め、12、13メートル先の建物を見る

五階建てのマンションの屋上に、一つの影

ひよろりと長い身体と手足を持つ、キザな銀ブチ眼鏡をかけた顔色の悪い男

「ほ、足を止めて下さったか。感謝感謝」

「木鳥だと!？」

木鳥は先日まで四国の川蝉に身を寄せていたはず

「そんな驚いた顔をしないで下さいよ。貴女様が盗んだ物の価値を考えれば、私が飛んで来る事も別に不思議じゃないでしょうに」

ねっとりとした声で木鳥は言い、ボストンバッグを指差す

「全く大胆極まりない。親方様は大慌てでございますよ?」

「……………」

「お手元の物をお返し下さい姫様。今ならば笑い話ですみましようぞ」

「断る」

「ほっ。したりしたり。ならば奪うまで!」

木鳥は奇声を上げ、屋根からこちらに向かい急降下する

「……………鬼狩りの姫を舐めるなよ」

否、鬼はもう狩らぬ。我が狩るのは鬼に群がり仇なす悪鬼のみ!!

「三つ！ 悪行、鬼切り丸一刀！！」

ギヤアアアア！！

「な、なんだ？」

なんつー不気味な声だ。猫でも轢かれたか？

「全く……勘弁してくださいよ」

せつかく静かで人が余り来ない新興住宅地だつてのに、騒がないで欲しいですね

「今日も今日とて平和に暮ら……」

ず、ず

そんな地響きにも似た、軽い音がした

その音が継続的に鳴り響き……

ズドーン

爆音と地響き、そして大量の土埃が舞う

「な、な！ なああああ！？」

何！？ テロ！？ 核爆発！？！

視界を奪う土煙。悲鳴に怒声

耳を澄ませると、数十メートル先にあるマンションが崩れたとかなんとか

「……………欠陥住宅って奴か」

国は何をしているのかね！

「……………よし！」

取り敢えずラーメンを食おう。そして眠るぞ！

マンションが崩壊しようが、国が滅びようが俺には関係無いのだ

「……………怪我人、いなければ良いけどな」

怪我人が居ないよう、勝手に祈らせてもらおうとしよう。ナムム

鬼切り丸の一太刀は鬼を断つ一太刀

その一太刀は、天にも届く大鬼すらも斬る

「……………やはり貴女様は恐ろしい」

腰から先の身体を失った木鳥が、最後の言葉を吐く

「町中で、それも鬼切り丸を何の躊躇も無く、お振りになるとは……」

ボストンバッグを足元に置き、両腕で構えたそれは、ドクン、ドクンと脈打つ鬼の肉で出来た太刀

浅い桃色をしたその刀を握ると、蛸の吸盤の様に肌に吸い付き、身体の気を奪う

「必要とあらば何度でも振る」

そう言いながら太刀を地へ突き刺すと、鬼切り丸の肉は飛び散り、濁った砂に降る雨の様に地面へと吸い込まれていった

「まこと……鬼……姫」

木鳥の死を確認せず、私はボストンバッグを持って再び走り出す

が……

「……追いつかれているか」

一見何も変わらぬ風景。しかし、既に石鬼の結界内に入った事を知覚する

こうなれば、もはや逃げられぬ。後は敵を切り捨て血路を開くしか

……

「……………姫様」

石鬼は手強い。奴を倒している間に他の者も追い付こう

そして余り考えたくは無いが、木鳥が来ていた事を思つと、他の六角達も来ているかも知れぬ

……………守りきれぬだろうか

「よい。我の事は気にするな」

私の感情を読んだのか、鈴のような幼子の声がボストンバッグから響く

「我をそこらに置き捨てよ。そして敵を討ち果たした後、迎えに来やれ」

「しかし姫！」

「我は大丈夫じゃ。おんしがおるでよ」

真つ直ぐで慈愛に満ちた声。姫は私を心底信頼して下さっている

「姫……………」

石鬼は私より姫を優先する。その隙をつき、即座に石鬼を倒せば……………いや

「……………駄目です姫様。例え一時でも姫様を危険に晒す訳には参りま

せん」

例えこの身が朽ちようとも全ての敵を討ち、姫を守る。それが最善の策だ

「…………おんしは愚かだのう」

「御意に」

「まったく。…………時に鈴華」

「はっ」

「あそこの小屋でアホ面をしながら我らを見ている小汚い男は、おんしの知り合いか?」

「は?」

その一声で、私は初めて私達以外の者が居る事に気付いた

「……………」

目が合った

ヤバイのと目が合ってしまった

夜の公園前で一人、肩に担いだポストンバッグへぶつぶつと語りか

けている女。

夏とは言え、これ以上ヤバイ奴が居るだろうか？

「……………」

「……………」

女は無言でこちらを見ている

仲間になりますか？ 何て選択肢が出て来そうな熱い視線だ

当然俺は、いいえを選ぶ

女はしょんぼりとして去って……

「おい」

凜と響く低い声だ。その声は明らかに不機嫌と言った色を持つ

俺はわざとらしく、左右を見回す

「お前だ」

惚けると殺すよ？ そんな九十年代に流行った不良漫画の台詞が似合いそうな赤く、鋭い眼光

赤？

自分の言葉に何故か疑問を覚えていると、女はゆっくりとこちらへと向かって来た



近づくにつれ、女の姿形がはっきりと現れる

「……………赤」

電灯の薄い光。その光の下で、まるでルビーを溶かして染め上げたような真っ赤な髪を持つ女は、厳かな響きを持った声で言った

「姫を預かれ」

髪より更に赤い、炎のような目で俺を睨みながら

## 第一章 鬼の姫様

「はあ」

赤い瞳に睨まれたまま、俺は適当に頷く

「良いか、預かると言う事は守る事。傷一つお受けにならぬ様、身を持って姫を守るのだぞ！」

「はあ」

「返事は、はいだ！」

「はい！」

夏休みに行ったラジオ体操の初日並に元気良い声で返事をした俺を見て、赤いねーちゃんは満足そうに頷いた

「よし。……姫様、どういう訳か、この場は現世と隠世が混ざり合  
い、揺らいでおります。この場ならば暫くの間、身を隠す事が出来  
そうです」

減税に閣僚が混ざり合い揺らいでいるから身を隠す？ 何言ってる  
だこの方は？ 政治家？

「貴様！」

「はいいい！？」

「姫様を頼む！」

真剣な目と声。その二つは余りにも真つ直ぐで、真摯な思いが詰まっていた

「……判ったよ」

いや、よく判らないが、とにかく判った

姫つてのが何なのか判らないが、この女にとってそれは大切な物であり、それを他人に委ねる事がどれだけ辛いかわ、強く握り締めた女の拳で良く判ったのだ

「姫様は俺が守るよ」

「ありがとう！」

仏頂面だった赤いねーちゃんの顔が、綻ぶ

それはまるで花が咲いたみたい……いやいや、俺は詩人じゃ無いぞ。美人が笑った。その表現だけで良いじゃないか

美人が笑った

「あ、ああ。どういたしま」

「引き受けたからには必ず守るのだぞ？ 約束を違えてみる、貴様の頭と首に永久の別れをさせてやるっ」

美人は鬼のような目で俺を睨んだ。少しちびった

「……それでは姫様、行って参ります」

赤い美人はポストンバッグを下ろし、その前でひざまずく

「うむ。吉報を待つ」

「うお！？ 怪奇、喋るポストンバッグ！？」

大型のポストンバッグがいきなり喋りやがった！

「お前は姫様とその小屋の中で待っている。一刻程で戻るつもりだが、それ以上掛かる様なら姫様に指示を煽れ」

「あ、ああ」

「では」

赤い美人は振り返り、公園の外を目指して走り去って行った

「……鈴華、必ず戻るのだぞ？」

怪奇ポストンバッグは、そう寂しそうに呟いたが、その声はもう届いていないだろう。

なぜならば赤い美人は既に遙か向こうへ走り去っていたからだ

「……戻って来いよ」

視界から消えた赤い美人に、何と無く俺もそう呟いてみる

「……さて、と。取り敢えず言われた通りにしますか」

俺はポストンバッグの取っ手を手に取り、ぐいっと

「重っ!？」

鉄アレイでも入ってるのか!？

「失礼だの、おんし。おんしが軟弱なだけだろうに」

小生意気な声で喋りやがるバツク

「少しびっくりしただけだ！ 見てろよ、こんなポストンバッグの  
一つや二つ、両手で持てば」

「鈴華は片手で持ったの。軽々と」

「……………私は姫様の安全の為、両手で持たせて頂きます。片手で  
も持てますけど!」

「くく。強がる男はいつの世も可愛いものじゃ。良かろう、両手で  
しっかりと我を運ぶが良い」

「……………ういっす」

なんだこの敗北感は？

俺はポストンバッグに負けたのか？ このイチキュッパで売ってそ  
うなポストンバッグに？

いや、イチキュッパあれば牛丼が五坏は食べれるし、そう馬鹿にし

た物では……………牛丼食いてえな

ギュルギュルギュル

愛しの牛丼の事を考えていると、腹が盛大になった

そついやラーメン食い損ねたんだった。早く食おつと

「よつこらしよつと！」

ポストンバッグを持ち上げて、テントへと運び入れる

「ふゝ、腹減つた」

バッグをテントの隅に置いて、カップラーメンを手に取り、蓋を開けて準備完了だぜ

「水は鍋にまだ残ってるし、後は沸かすだけ」

残念ながら豚骨味はもう無かった。だが、黄金の塩味がまだある

「俺は塩味のカップ麺が一番好きなんですよ」

「ほう、気が合うな。我も塩味が好きじゃ」

「あ、そうなんすか？ てゆーかどうやって食うんすか？ チャックからっすか？」

適当に聞き流し、沸いたお湯をカップラーメンの中に注ぐ

「後は三分待つだけ。俺は一分だけど」

「我は五分じゃ。量も増えてちよっぴりお得じゃろ？」

「ふっざけんな〜！！ 三分なら良い、四分もまあ許す！ だが五分は無い、五分は無いぞ！！」

たわけた事をぬかすポストンバッグに、俺は熱い怒りをぶつける

「そんなもの好みの問題じゃろうに。それよかおんしよ、一分は有り得ぬ。それは只の馬鹿じゃ」

「何だこの野郎！ なら食べ比べんぞ！！」

俺はポストンバッグを肅正しようと飛び付き、強引にチャックを開けた

「む？ 間抜けな声じゃと思っとなが、改めて近くで見ると、ほんに間抜け面じゃの。やはり声は人を表わすのう」

開けたポストンバッグの中には、膝を抱えて窮屈そうにしている白い装束を着たガキンちよが入っていた

「ガキンちよは、よいしょっとポストンバッグから抜け出て、肩まである銀色の髪を掻き上げる」

「ふむ？」

「まだ7、8歳なのだろうあどけなさが残る顔と身体。

しかしその顔は完璧に近いほど整っている」

「ふむ」

「すーっと真つ直ぐ通った小鼻や、桜色の薄い唇。ほっそりとした頬に、軽く吊り上がった生意気そうな目元。そして全体を漂う妙な色気」

「生意気は余計じゃな」

「美少女と呼ぶのには躊躇われる程の美貌。それをまだガキンちよの癖に、このガキンちよは持っていた」

「おんし、褒めるのは良いが、ちとガキンちよと言い過ぎじゃ。我はおんしより年上ぞ？」

「なっ!?! 怪奇! 心を読む少女!」

「頭の方は大丈夫かいの?」

「う、うるさいな、冗談だよ冗談! しかしマジで美人面だな」

ガキンちよの面を絵画を見るかの様に、まじまじと見てみる

「……飾り付けの無いおんしの言葉に免じて許してやるが、その不躰な視線。本来ならば罰則ものじゃぞ?」

「おつと悪いな。十分目の保養になった、もう見ないよ」

「ふむ。……ところでラーメン、いつまでほっとくのじゃ?」



「……………あ」

恐る恐るフタを開けてみると、倍ぐらいに膨れ上がった麺と、微妙に温いスープ

「……………食べるか？」

「我は五分ものしか食わん」

「……………そう」

勿体ないので、渋々食べる事にした。まずい

「好きな物食えよ。つってもカップ麺しか無いが」

ズルズルと伸びた麺を食いながら、まだかなり有るカップラーメンの山を指差す

「む……………ほう、ホームランがあるとはのう。中々の通じやな？」

ガキんちよは、ごそごそとラーメンの山を探り、感心した様な声で言った

「……………やるなお前」

まさかそれに目をつけるとは……………

「しかし今はいらぬ」

「ん？ 腹減って無いのか？」

「我を守る剣が懐に戻る迄は、何も食う気がせぬ」

そう言つてガキンちよは正座し、背筋を伸ばす

神々しい

ガキンちよの姿を見て、迂闊にもそう思つてしまい、一度思つてしまつたらズルズルカップラーメンを食つてるのが少し恥ずかしくなる

「……直ぐ戻るだろうからな」

恥ずかしさをごまかす様に、そんな愚にも付かない事を呟くと、ガキンちよは俺をちらりと見て、うむっとしっかり頷いた

## 一章 裏

大丈夫なのか？

その疑問は尽きない

あんな正体も判らぬ様な男に、姫を任せて本当に大丈夫なのか？

私は地を駆けながら何度も反芻する

大丈夫だ

あの男なら大丈夫

何故か確信があつた。勘と言つても良い

その妙な勘が、また私を惑わす

「……………詮なき事」

考えた所で答えなど出ない

一度任せただ、信じるより他無い

それより今は…………

公園から一里は離れたであろう広場。周りには建物も、電灯の光も無く、地にはただ土が広がっているそんな場所

そこで私は走る足を止めた

「……………石鬼」

待つ事二十と三秒

呼び掛けた私の8メートル前に、男が浮かび上がる

服は白のスーツ、肌は雪の様に白く、顔には白粉を塗っており、その目は白く濁っている

そして髪もまた、おかつぱのような長髪を、真っ白く染め上げている

不気味な男だ

しかし、その身体は無駄な脂肪一つ無い程に鍛えられており、何より隠しきれない覇気がある

勇猛果敢な猛者。このような奇抜な風体をしていても尚、そう呼ばれる武人

「お早いですねえ」

何が、とは聞かない

「……………斬る」

一刻も掛けぬ！

「我が内に眠る八と三の太刀よ！」

これで日に五度目

刀を喚ぶ度に痛む身体、抜けてゆく力。一刀毎に死に近づく

後、何度喚べる？

「……何度でもだ！ 二つ！ 不知火、菊一文字則宗一刀！！」

そう叫び、右腕を左から右に大きく一文字に振る

振った腕の軌跡は、揺らぐ陽炎。

ゆらゆらと揺れに揺れ、陽炎は一振りの白く美しい刀となる

「菊一文字ですか。参りましたなあ」

苦手だ。そんな表情をする石兎

だがそれは、この刀を使う所を見た事が無い為、少々やりづらい。  
その程度の物

「鬼狩り姫。私は貴女とは戦いたくは無いのですがね？」

「ならば黙って斬られれば良い」

間合い。間合いとは気の空間。それは個々が持つ無色透明の反発し  
合う磁力場。

手を伸ばせば相手を殺せる、そんな空間が間合い

それは当然広ければ広い程、良い

持つ刀によって異なるが、私の間合いは約、半径5メートル

その内ならば、相手が一度の瞬きを終える前に切り捨てられる

私は鞘に収まっている刀を左腰に差し、腰を浅く落として右足を一步前に出す

「居合ですか？」

「届かぬと思っているか？」

「さあ、それは判りませんねえ。菊一文字は使われる所を見たことがありますし。試しに撃つてみて下さいませ」

「応っ！ おのが首で試してみよー!!」

右腕を刀の柄に伸ばし、身体を捻りながら一気に引き抜く

ギーーーーーイ

ガラスを思い切り引っ掻いた様な音が鳴り響き、斬撃が夜の闇を切り裂きながら石兎へ向かって飛ぶ

鎌鼬。そんな名が付いている風の刃

「いやいや、やはり届きませんなあ」

石兎はしゃがみ、刃をかわす

「では、少し楽しむとしますか」

そしてしゃがんだ足をバネに、私に向かって跳んだ

まるで大砲の弾の様に真っ直ぐ飛んで来る石兎。振った刀を構え直す間には、私の身体は石兎によって弾かれているだろう

「しかし馬鹿だな貴様」

わざわざ私の間合いに入るとは

「菊一文字は幻惑の剣」

一度振った剣筋は

「七度辿る」

最初の斬撃と全く同じ軌道で、六つつの刃が石兎に向かって飛ぶ

刃が当たる度、空中で踊り、最後には地面へと激突し跳ね上がる石兎。

全ての刃をまともに受けたのだ、身体はズタズタに引き裂かれているだろう

「……楽しめたか？」

返らぬ返事など待たず、私は振り返り、再び走り出した

妙

それを感じたのは石兔を倒し、数人の雑兵を昏倒させた後だ  
結界がまた広がっている

石兔の結界では無い。匂い、そして温度が違う

この甘く、女の肌の様な結界は……

「……千菟」

六角衆が一人、首刈り姫

「貴様まで来るか」

私は明かりの付いていないマンションのガラスドアを蹴破り、非常階段を昇って五階の通路へと出る

細く真つ直ぐな通路。そこがあの女を迎え撃つのに一番適している  
待つこと八十秒。

ガン、ガン、ガン、ガン

階段に何か重い物がぶつかる音が継続的に鳴る

それは段々と近付き、側でした後には、予想通りの女が通路奥から  
現れた



「まだ九百三十一人」

美しく長い黒髪と、闇に冴える紅い唇。

着物から胸の上部を大きく開けさせた妖艶なる女

その女は、華奢な腕には似合わない二つの大鎌を、引きずる様にして持っている

「千人目の首は鈴華、あんたにしよう思っとなんや……」

「それは残念だな」

それは叶わぬ

「四つ！ 悪行、蜘蛛切丸一刀！！」

目の空間から、つつつと血が滴り落ちる

その血を飲み込む様に肉が湧き、膨れ、そして萎んでベチャリと落ちた

落ちた肉から柄が生える

その柄を、引く

ギヤアアアア

耳が腐りそうな悲鳴

肉からズブズブと抜き放たれたるは、鈍い黄金色の刀、蜘蛛切丸。もう一本の鬼切り

長さも太さも威力すらも鬼切りには届かない

しかしこれは

「女の肉を好み、それを食う」

まさに悪行

「一日の内にまだ刀を出しますか。ほんに呆れた精神力」

「……………構えよ」

何故そんな事を言う？

何も言わず斬れば良い

早く肉を食わせる

頭に響くこの声は、刀か私か

「構えよ！」

苛立ちを含む私の声で、年上の幼なじみは両鎌を持ち上げ、交差するよに両肩に担いだ

「……………行くぞ、千菟」

「どつぞ」

「おおおおお！」

両手で柄を握り、左肩に刀をしょい込む様に構え千菟へ突進する

シュ

風を斬る音が鎌の軌道を教えてくれた

振り下ろされた右の鎌を内にかわし、刀を袈裟切りに振り下ろす

ギイイン

鉄と鉄が弾ける音。左の鎌で防がれた

違う。防がせたのだ

「喰らえ、蜘蛛切りよ！」

二八本の鳶が、蜘蛛切りの刃から飛び出る

それは鋭く尖り、千菟を襲う

「あれま、げに恐ろしき刀やねえ」

鳶は千菟の身体を幾十も貫き、貫かれた千菟はビクンと数度跳ねた後、動かなくなつた

「……………」

まだ食い足りない。そう哭く刀を引き、肉へ戻す

同時に鳶は抜かれ、ゆっくりと千菟は倒れる。通路に血がジワリと広がった

「……………千菟」

……………感傷に更けている場合では無い。これで追っ手はあらかた片付いただろう、そろそろ姫を迎えに行かなくては

「……………気持ちええぐらい手加減無しやねえ」

「っ!?!」

千菟はゆらりと立ち上がる。着物には数十の穴が空き、血で真っ赤に染まっているが、身体の傷は……………

「……………貴様、喰ったのか?」

「うちだけじゃなかよ」

ぞくり

背後から寒気した

振り向けはしない。振り向いた瞬間、私の身体は鎌によって裂かれるだろう

「……………石兔」

「いやいや先程は楽しかったですよ、鬼狩り姫」

「木鳥！」

「まこと姫はお強い」

「この外道共が！」

強い怒りは悲しみに似ている

私の目から暫く見た記憶が無い水滴が零れた

「悪鬼羅刹ども！ この鬼狩り姫が叩き斬ってくれる！！」

そう叫び、私は七本目の刀を喚んだ

## 一章 2

「……………そろそろ我は行く」

さっきまで頭が痛くなるぐらいに鳴り響いていたパトカーや消防車のサイレンが消えた頃、ガキンちよは静かにそう言った

「行くつて……………何処にだよ」

「北じゃ。北に我の祠がある」

すつと立ち上がり、テントを出ようとするガキンちよ

「ま、待てよ！ あの美人を待たないのか？」

「一刻半」

俺の呼び声にガキンちよは立ち止まり、ぼそりと呟く

「え？」

「あれから一刻半が経つておる。鈴華の身に何かあったのじゃろ？」

「何か？」

「……………とにかく我は行く」

「ま、待てつて！ よく判らないが隠れてるつて言つてただろ？ 外は危ないんじゃないのか？」

このまま暫く隠れてりゃ良いじゃ無いか、そんな俺の言葉にガキんちよは言う

「鈴華なら」

微かに潤いを帯びた声で

「鈴華ならば例えどの様な事態になろうとも、我に迫る危機を排除する。今ならば我を追う者も居まいて」

それは確信。絶対の信頼

「世話になったの。また会えたならば、礼は必ずする」

そう言っつてガキんちよは生意気にも、寂しそうに微笑んだ

「……そんな面、ガキには似合わねーよ」

「……ではな」

その小さな身体には大き過ぎるボストンバッグを手に持ち、テントを出てゆくガキんちよ。

テントの中が急に寒くなった様感じた

「……何だったんだか」

マットに転がり、いつもの独り言だ

これでまたいつも通り平和で、何も無い明日が始まる

珍妙な客なんざ来ない平和な明日

一日一日の食い物の事だけを心配し、身を凍らす寒さに歯を食いしばって堪え、朝の太陽を愛おしく思う平和で退屈で惨めな明日に

そんな明日は……

「ラーメン食ってけよー!!」

俺はテントを飛び出し叫んだ

「ぬ？」

公園の前で振り返るガキンちょ

「話しはそれからだ！」

そう、話しはそれから

俺は

「約束したからな。お前を守るって」

そんな明日には、もう飽きたから

「おんし……我に惚れたか？」



テントに戻ったガキンちょの一言め

「ば、ばっか!? オメーばっかじゃないの!?!」

「くく、すまんの。……我の身、宜しくお頼み申す」

深々と頭を下げるガキンちょ。その頭をぐりぐりと撫でて

「任せろ!」

何を任せられるのか良く判らないが、とにかくしつかりと頷いた

「だけどラーメンは一分の方が美味しいんだぜ?」

これだけは譲れ無い

「しつこい男だの。五分を一度食べてみい」

どうやらガキンちょも譲れないらしい

「ちえ……そういえば、お前名前は?」

「酒呑童子傀凜」

強引に俺が食わせたカップラーメンを、ズルズルと食いながらガキンちょは言った

「……変な名前だな」

「大きなお世話じゃ。人の名を尋ねたのだ、おんしも応えい」

「俺か？ 俺は……」

古めかしいし、あんまり好きな名前じゃ無いんだが……

「俺は……なんじゃ？」

「俺は……」

「勿体振らずに、はよ言えい」

「……田中 剣之助」

「田中 剣之助!？」

目を見開いて驚くガキンちよ

な、なんだこのリアクションは？ まさか知らない間に俺の名は  
ナウなヤング達の間で人気のカリスマホームレスとして有名に!？

「溜めた割にはつまらん名じゃな」

「ほっとけ!」

何だったんださっきのリアクションは!

「剣之助。そろそろ此处を離れるぞ」

「いきなり呼び捨てかよ……直ぐに離れないと駄目なのか？」

外は夜が深まり、風は冷たい。出来れば日が昇ってから……

「そろそろ鈴華が稼いだ時も尽きる頃。六角どもは我が此処付近に隠れて居る事を知っておる。もうじき犬どもが来るじゃろつて」

「犬？ 俺、犬は好きだぜ？ ブリーダーを目指してみようかと思つた事もある。ま、俺に任せとけ！ 軽く手なずけてやるぜ」

「それは頼もしいのう。一噛みで肉を貫き、骨まで砕く牙を持つ犬を軽く手なずけられるとは。期待しておるぞ？」

全く期待をしていない目で、ガキンちよは俺を見上げた

そんな目をされちまつたら仕方がねえ！

「早く行きましょう、姫様」

「見事な軟弱ぶりよの。褒めてやる」

本当に感心した声でガキンちよは俺を褒めやがった

「ふん！ ……移動か」

全部は持って行けないな

中をぐるりと見回し、必要な物だけをスポーツバックへ急いで詰め込む

ラーメン二個、パンツ三枚、シャツ二枚にトレーナーを一枚。後は

シート

テントは惜しいが……

「早くゆくぞ」

畳んでいる時間も無いらしい

「あいよ姫様」

「おんしに姫と呼ばれると何故かさぶいぼが出来るのじ」

ぼりぼりと腕を掻くガキンちよ

「とは言っても何て呼べは……」

しゅてんどうしかいりんだったか？

全く、どういう親だよ

「……凜で良いか？」

「またえらく、はしよったものよの」

「なんだよ、他にどう呼べってんだんだよ」

口を尖らせブーイング

「いや、それで良い。名など只の記号じゃ、好きに呼べ」

ガキんちよの癖に達観していやがる。……こんな名前を付けられりやそうなるか

「よし。それじゃ行くぞ凜！」

「うむ」

頷き合い、俺と凜はバッグを片手にテントを出る

「そのバッグ持ってくるのか？」

宿主を失ったからか、何だか寂しそうに佇むテントを見て、軽い喪失感を感じながらも北っぽい方向へ俺は歩く

「うむ。このバッグの中には因果無形の札が縫い付けてあるのじゃ」

そんな俺の横へ並ぶ様に凜もまたポストンバッグを抱えながら、歩き始める

「へえ〜。因果無形ねー」

さっぱり判らん

「耳なし芳一ぐらいは知っておるじゃろ？」

「ああ。耳に文字書き忘れて耳取られた坊さんだろ？」

「同じ様なものよ。この中に入っておれば私の気配は隠れる」

「しかし耳は出ているってか？」

「私の抑え切れん色気がな」

隠れる事は隠れるが、じっくり見ればばれてしまう。その程度の隠れみのつて訳か

「なるほどな」

「判った所で我はバッグに入るから後は運べい」

そう良いながら凜はバッグを置き、よいしょとバッグの中へ入っていった

「……………嘘だろ？」

「私の身を頼むと言ったじゃろっ？」

良いながら、チャックを閉める凜

「……………そう言う意味か」

俺は渋々バッグを手に取り…………

「やっぱり重っ!？」

肩に担ぐと、骨にずしりと響いた

「失礼な男だの。我を腕に抱ける程の幸運、そうは無いぞ？」

「そんな運はいらね」

「泣き言を言つて無い。ほれ進め馬よ！」

「ふざ……けるな」

こうして北へと向かう旅は、よろよるとふらつく俺の第一歩で始まった

ホームレスから馬へとレベルアップ？　した俺は次は何になれるのか

「おんしはくらげか？　性根を入れて真っ直ぐ歩けい！」

……くらげだった

## 第一章　了

## 第二章 北への道

「んで、北って具体的には何処だ？」

公園から数百メートル歩き、肩の重さに少し慣れて来た頃、俺はボストンバッグに話し掛ける

「越後じゃ」

「えちご？ 奈良だったか？」

確か日本史でやったような……

「新潟じゃ」

「新潟……新潟！？」

新潟ってお米の新潟か！

「めっちゃ遠いじゃ無いつすか！？ 乗り物が無きゃ何日も掛かるぞ！」

「それでも無かるう。京から此処まで来るのに二日と掛かっておらん。距離は後半分も無かるうて二日でゆけるじゃろ？」

「いや行けませんよ！ 神奈川ですよ此処！？」

思わず敬語になった俺に凜は妖艶な声で囁く



「男じゃろおんし。我におんしの男を見せてみい」「うるせ〜ちびつ子！ 無理なものは無理だ！」

「む。我がこんなにもサービスをしてやってると言うのに、不甲斐ない男じゃの！」

「何処にサービスがあつたんだよ！」

「我におんしの勇を見せるチャンスを与えてやったるうに！ 男子の誉れぞー！」

「な〜にが男子の誉れだよ！ こちとらガキに声色使われて喜ぶ変態じゃ無いんだっての！」

「我は貴様より遙か年上じゃ！」

「何を、……ん？」

十メートル近く離れた一軒家の陰から、僅かな光が洩れた。

まるで蛍の様に小さい光

「あれは……携帯!？」

「ひっ!？」

俺の声に驚いたのか、女と思われる短い悲鳴が聞こえ、次にパタパタと走り去る音が響いた

「……ヤバイな」

あれは恐らく、この新興住宅地に住む数少ない住人の一人であろう。  
警察か何かを呼んだ可能性が高い

怪しげな男を調べ、ポストンバッグを開けたら少女が入っていた…。

何ともぞつとしないシチュエーションだ

「逃げるぞ」

「む、ぬ、ぬおお!？」

バッグを両手で持ち、全速力で走る

「お、おんし、ぶつぶつ言っていた割には中々早いのがう！　しかし  
まだまだじゃな。これでは越後まで六、七日は掛かってしまうぞ?」

「口を閉じてろ！　舌噛むぞ!！」

それに受け答えしている余裕も今は無い！

俺はとにかく必死に足を動かし続けた

「ハア、ハア、ハア……此処まで来れば」

十分の全速力疾走。此処まで走れた自分を褒めてやりたいです

「こら、止まるで無い！　まだ半里も進んではおらぬぞ」

「む、無理を言つなよ」

卒業してから一度も走った事が無いってのに

「……今の男衆は不甲斐ないのう。我が若かりし頃には、重き鎧を纏った武者共が日が落ち、また昇る間に十里、十五里と駆けとつたものよ」

どこか遠い声で、昔を懐かしむかの様に凜は言う

「……ちえ、何が昔だよ。どうせ時代劇か何かだろ？」

そう言いながら俺はバッグを担ぎ直す

「今の男共の気合い見せてやるよ」

舐められっぱなしってのもアレだしな

「む？ うむ！ その意気や良し！！ 我が見ておる、しかと駆けいー！」

「おうよー！！」

俺は力強く地を蹴り飛ばし、走り出した

そして座り込んだ

「す……みま……せん。い、今の……男衆共は……んくっ、ゴホッゴホッ！ ふう、はあ……く、クズです」

ですが十五分。あれから十五分走った自分を出来れば褒めてあげて下さい

「不甲斐ない！」

ボストンバッグは怒りの声をあげて下さいました

「ひ、酷い……鬼だ」

「いかにも我は鬼だ。しかし今は角無しじゃ。おんしらとそつは変わるまい」

「い、いや。滲み出ている。サディストと言う名の角が……」

この歳で未恐ろしいガキンちょだ

「我はどちらかと言えばマゾぞ？ サドの頼光とは気が合ったものじゃ」

「……凜のご両親に一度会ってみたくなつたよ」

どついつ教育をしてんだ本当

「……そついや親とか心配しているんじゃないのか？」

そもそも何で北に行くのかすら判らない

「親などおぬよ。強いて家族と呼ぶのなら今は鈴華だけじゃ」

凜は淡々と話す。その声には悲しさや、寂しさは無い。ただ事実を話している、そんな声

「……そうか」

悪かった。そんな意味の無い謝罪は出来ない

だから俺は立ち上がり、また走り出した

「凜の言う通り俺は不甲斐無いし、無理は出来ないが……」

なるべく早く新潟に行ってやるよ

## 二章 2

走っては休み、走ってはまた休みを繰り返して、空の色が透明になってきた頃、俺は小田原市内へと入った

「ふいふやっつと小田原かよ」

まだまだ先は長い

「腹減ったな。凜、コンビニがあるぞ、何か食つか？」

財布を広げると、まだ虎の子の野口先生が三枚入っている。上手く使えば新潟まで何とか餓死せずに行けるだろう

それにしても……

「たまには諭吉様に会いたい……」

抱かれても良い

「何を黄昏れておる。何か食べるのなら、はよ買いに行かんか」

「はいはい。……おにぎりが良いか？」

「我は要らぬ。バッグに入っているだけじゃ、腹も空かぬ」

「そうは言ってもな……じゃ何か飲め」

こんなバッグに入っていて疲れない訳が無い。何か口に入れておかな

いと持たないぞ

そんな俺の考えが通じたのか、凜は

「なればミルクじゃ」

と、言った

「あいよ」

バッグを軽く持ち直し、コンビニへと入る

「いらっしゃいませ」

まだ太陽も出ききっていない早朝だと言つのに、随分明るい男店員が俺達を迎えた

「おにぎり、おにぎりっ」と

俺は真っ直ぐにおにぎりコーナーへと行き、商品を選ぶ

「久しぶりだぜ、米は！」

パッケージを見るだけで興奮してしまう

「ツナが一番カロリーあるか……安いし」

いや待て。ドデカおにぎり150円の方が、お得じゃないか？

「いやいやカロリーだけなら、この六個入りのレーズンパンが……」

「はよ選べ」

店内をうろちよろ歩く俺に、凜が呆れた様に言う

「わ、判ってるよ。でもな、これは極めて重要な選択なんだ。少し間違えれば俺は電池が切れたおもちゃみたいに動けなくなってしま  
う」

五日何も食わなかった時に経験済みだ

あの時は身体がふわふわつとして、歩くだけで足が怠くなり、胸が痛くなった

「だから上手い事カロリーを取らんと大変な事になるのだよ」

人間は所詮、機械の様な物だ、エネルギーを失ったら倒れてしまう。  
あの時それを悟った

「なれば兵糧丸を買えば良いじゃろ？」

「兵糧丸？」

「高タンパク質、高カロリーの携帯食じゃ。カンパンでも良いが」

「……………ああ、なるほど」

カロリーメイトとかの事が

「でもあれ、食った気しないんだよ。あれ食うならやっぱ……………」



「む？ どうした？」

「は、貼ってる」

「むむ？」

「値引きシール貼ってるよ！」

俺の瞳から涙がこぼれ落ちた

「コンビニなのにどうして！」

俺は店員に走り寄り、聞いた

「うわっ！？ な、何ですか？ ……え？ シールですか？ うちのコンビニは残りの賞味期限で値引きしますから」

「あ……ありがとう」

俺は気持ち悪そうな顔をする店員に無理矢理握手し、30円安くなったドデカおにぎりと、メロンパンを手を取った

「……牛乳は貼らないのかな？」

「貼りません！」

「このドケチがー！」

「本当ケチな店員だったな！」

メロンパンを咀嚼しながら、俺はぶんすかと抗議をする

カチヤ

「……………いや、何も言つまい」

何故か凜は諦めに近い声で呟いた

「なんだよ、言いたい事があれば言えよ」

「いや良いのじゃ。言つても詮なき事」

何だか凄まじく呆れられ気がする

カチヤ

「しかし器用だな凜は。よくバッグの中で飲めるよ」

ストローがあるとは言え感心してしまう

「何事も慣れじゃ。慣れと経験に勝る教科書は無い」

「そっか」

余り慣れたいとは思わないが……

カチャ

「……時におんしょ。先程から何をしておる？」

「ん？ ああ、これ？ 自販機の釣銭調べているんだけど？」

カチャ

「……いや、何も言つまい」

「な、なんだよ？ い、言いたい事があるなら言ってくれよ」

「いや良いのじゃ。おんしはそのまま腕白に、じゃが遅しく育てゆけば良い」

何だか凄まじく見放された感じがする

「ば、ばかに出来ないんだぞ！ 上手く行けば一日に数百円稼ぐ事だつて出来るんだ！」

「うむ、うむ。判つた、判つた。おんしは偉いのう」

何の感情も込められていない

「………俺、もう釣銭探し卒業するよ」

「………うむ、それが良かろうて。第一、効率が悪い」

「ああ！ 今日からは自販機の下を探すよ！」

実はこっちの方が高収入なんだよな！ これなら凜も感心の声を……

「……………探す時はなるべく我から離れるのじゃぞ？」

返って来た声は冷たかった

「おゝ小田原城ゝ」

空にまばゆい太陽が輝く午前九時。俺達は小田原城へたどり着いたフリーマーケットをやっているのか、城近くにある広場は多くの人々がシートに品物を出して物を売っている

「凜、小田原城見て行くか？」

「おんしがどうしても言うなら見ても良いが、時間は無い。素早く見るのじゃぞ？」

「ああ。城の前を通り過ぎるだけにしておくよ」

神奈川に住んでおきながら、今まで一度も間近で見た事が無いからな

「小田原城は豊臣秀吉が攻め落としたんだぜ」

城を近くで眺め、知ったかぶりをする。

無敵の城って割には意外と普通の城に見えるな

「うむ、城主が氏直の時じゃな。太閤秀吉は圧倒的な物資を持ち寄り、城の周りを囲んで兵糧責めをおこなった。

その時城内では、答えが出ぬと言う全く意味が無い議論をしており、それで何と三ヶ月もの月日を無駄に潰したのじゃ。結果氏直と氏政は戦いもせず城を明け渡す事と相成った訳じゃな。

北条家は城より人を残すべきじゃったよ」

「……………ガキンちよの癖にスゲーな凜は」

「ガキでは無いと言っておるだろうに全く……………む！」

「どうした？」

「犬が……………おる」

「犬？」

左右見回し、次に軽く振り返る

「……………ああ。居るな真っ黒いのが」

中型犬ぐらいの大きさだ

「……………おんし、妖魔退治の経験は？」

「ようまたいじ？ 何だそりゃ」

「ある筈無し……………か。よし、逃げるぞ剣之助！」

「は？ に、逃げるって何から」

「あれは我を追う魔犬じゃ！」

凜がそう鋭く叫んだのと同時に、背後の犬が走り出す

「ま、魔犬！？」

なんだそりゃ？ などと聞く余裕も無く、俺はバッグを持ち直し、迫る犬から逃げ出した

## 二章 裏

目覚めた時、私はまず手足の不自由を感じた

「……………ここは」

次に疑問だ。此処は何処なのか……

おそらく部屋。それも窓一つ光一つ無い部屋だ。一寸先も見えやしない

「……………」

何故、私はこの場所に居るのか。闇に目を慣らしつつ、それを考える

私は……

「……………負けた」

そう、私は負けたのだ

八度回目の召喚の時に、刀の召喚を失敗し、その影響から血を吐き、膝をついてしまった私に、石兎達は一斉に襲い掛かった

抵抗し、暴れる私を奴らはいとも簡単に抑え、意識を奪う

『鬼狩りの姫も、剣がなければ気が強いただけのか弱い女性ですな』

気を失う直前に聞いた、木鳥の私を嘲笑う声が今も耳に残る

と、なれば今、この現状は奴らに捕らえられていると考えて良いだろう

成る程、この手足の不自由は術式による束縛か

「……………くそ！」

沸き上がる屈辱と怒り

姫様に必ず戻ると言っておきながらこのような不覚をとってしまったとは

奥歯を強く噛み締め、屈辱に耐えていると、ギィッと木か何かが床に擦れる音がした

それと同時に部屋が明るくなる。部屋内にある蠟燭が一斉に燃だしたのだ

「お目覚めですか、鬼狩り姫」

蠟燭の明かりの中、木と鉄の枠で出来た扉の前に浮かぶ白い男

「石兔っ！　ぐう！？」

我を忘れ、石兔へ飛び掛かろうとする私の手足を激痛が襲う

「いけませんよ姫。今、貴女の身体には封身の秘術を施しておりません。無理に動けば細胞が壊れ、その美しい四肢が崩れ落ちましようぞ」



封身の秘術。その言葉を受け、身体を見る

今の私は一糸纏わぬ裸体であり、その身体、胸、腹部、腕、足には隠形の術文が施されていた

そしてこの術文は私には解けぬ程に強い

「……ゲスが！」

「勘違いしないで下さいね。私は貴女様を辱めるつもりなどありません。ですが、貴女様は危険過ぎます故、このような対応をさせて頂きました」石兎は芝居掛かった風にそう言い、慇懃に頭を下げた

「ふん。貴様はそれでも私を犯したがっている者は居よう。私は敗北したのだ、どのようにされても構わぬ」

死は元より覚悟の上。屈辱も耐えよう

なればこの身体を毒にして、一匹でも多く悪鬼共を道連れにする

「……本当に恐ろしいお方ですね貴女様は。貴女様こそ真の羅刹。ですが心配しないで下さい貴女にはこの石兎以外触れさせません」

「……どういう事だ？」

「勿論、その美しき身体を汚す事も致しません。私が望むのは貴女様に眠る刀のみ」

「っ！？ 貴様！！」

「私達が得た鬼。その半身たる刀。返して貰いますよ、鬼狩り姫」  
そう言い、石鬼は私の下腹部へ軽く触れる

「貴様っ！ぬ！？う、うぁ！」

ズブズブと石鬼の手が、私の身体へ入ってゆく

気持ち悪い、圧迫される

汚されている。私は今、身体を犯されているのだ

私はそれを強く感じ、歯を噛み締めて石鬼を睨む

「……申し訳ございません姫。一刀、最初の一刀だけは強引に奪い盗らなくてはなりません」

「奪い……盗るだど？」

何を言っている。刀は私の中に眠るとは言え、私の身体にある訳では無い

私の精神。その海に眠るのだ

「無駄な事を」

「残念ですが」

無駄ではございません

石兎は言葉と共に、私の身体から手を抜く

「うん？ ……あ」

瞬間的に悟った

今、私は大切な私の一部を失ったのだと

「あ、ああ」

涙が溢れる

「ああああ」

「お許し下さい……とは言いません。いつか、またいつか相見える時は、どうか私をお殺し下さい」

石兎は再び私の身体に手を入れ

「ああ！」

私の一部を完全に抜き出した

## 二章 3

一直線に俺達の元へ掛けて来る黒犬。

俺は小石が敷き詰められて走り難い城下道に苦勞しながら、必死に逃げた

「は、速い！ 速いぞあの犬！？」

犬は凄まじく速く、俺達と犬の間にあつた20メートル近い距離はグングンと縮み、犬の餌にありつけた獣の様に爛々と輝く双眼と、しっかり目が合ってしまう

「めっちゃ怖わ！？ あいつの目、めっちゃ怖いぞ！！」

その強い眼光に足がガクガクと震え、腰は碎けそうになる

「しっかりせい！ 前を見て走らんか！！」

俺の恐怖を晴らす、凜の鋭い叱咤の声

「あ、ああ！！」

犬を見ながら走るのは止め、俺は逃げる事に専念した

「奴の目は何色じゃったか！？」

「は？ ……み、緑だった！！」

不気味に光る緑目。あんな目は見たことが無い

「ならば奴はまだ私の存在に感じておらぬ。あの場に残っていたおんしの匂いを追って来たのじゃろう。なれば……」

凜は言葉を区切り

「やはり奴を倒せい、剣之助！」

と無茶な事を言いました

「む、無理に決まってるだろ！ 人間は武器を持ってなければ野生動物に勝つ事は難しんだぞ！ 昔、偉い空手家の人が言ってたんだぞ……」

「なれば今こそおんしの封印されし力を開放するのじゃ！」

「んな都合の良い力はねえよ……」

「ほんに不甲斐男じゃなあんしは……！ 二十過ぎて何も取り柄が無い男なぞ厳しい現代社会では通じんぞ……」

「あ！ 言っちゃった！ 遂に禁句を言っちゃった！ もうやだ、引きこもっちゃうぞ俺……」

ホームレスで引き籠り。新しいな。ドラマ化するかも……

「ガアウ……」

「うわっ……」

吠え声に振り返ると、犬は俺の直ぐ後ろまで迫っていた。

後、僅かな数秒足らずで追いつかれてしまう距離

「ちくしょう！」

俺は自分の荷物を犬に向けて放り投げた。

犬はバツクをかわす為僅かに足を遅らせたが、直ぐに体勢を整えて追跡をする

だが、その間に俺も撃退の準備を整えていた

「……動物相手に気は進まないけどよ」

俺の右手には、溢れんばかりの石つぶて。

走りながら強引に拾った為、指がじわりと痛む

「石、投げさせてもらっぜ？」

「……当たるかのう」

「ば、馬鹿にするな！俺は中学ん頃、南ちゃんを甲子園へ連れて行くのは自分だと信じていた男だぜ！！」

若気の至りだった……

「……そうか、それは良かったのう。ちなみに我は新田の妹の方が好きじゃったよ」

「あ、気が合いますね。実は俺も」

「良いから早く投げい」

「お前が話を振ったんじゃないか！」

そう言いながら石を犬に向け、投げる。

加減はしているが、当たれば……

「当たらぬのう」

「……………」

犬は軽く右に避け、見事紙一重でかわしやがった

「まだまだ〜！」

次は強めに投げる。だがその石も軽いステップであっさりかわす黒犬

「当たらねえ！ 当たる気がしねえ！！」

何度となく投げる石は、掠りもせず、黒犬の追跡を若干遅くするだけだ。しかし、振り向き投げる俺も当然足は遅くなる為、距離は拡がらない

そしていよいよ石が尽きかけた時、凜が呟く

「……………おんしでは無理じゃな、かような無茶を頼み、すまんかった。我を下ろせ剣之助。このままでは逃げ切るところかおんしが食い殺されてしまうわ」

その言葉に俺への責めは無い。そうする事が一番良いと言っ響きと  
気遣いがある

そんな言葉を聞いてしまったら当然

「はいそうですねって訳にはいかないだろ！」

俺は完全に振り返り、黒犬と対峙する

俺の覚悟が伝わったのかドーベルマンの身体にブルドックの様な低  
い鼻を持つ黒犬は口を開け、長い二本の上牙を剥き出しにした

「こ、来いよこのやろう」

生まれて始めて受ける明確な敵意を前に、俺の声は震え、身体は緊  
張で硬くなる

だけど！

「俺に任せる！」

「剣之助……よし、一蓮托生じゃ剣之助！ 我の身、おんしにお頼  
み申す……！」

「おつよ……！」

たまには姫様を救う役つても悪く無いだろ俺！



## 二章 4

全力で投げる石。しかし黒犬は全てをかわす

「くそ！ もう石がねえよ！！」

言葉が通じた……訳じゃないんだろうが、犬は石に対する警戒を薄め、一直線に向かって来た

「ウガウ！」

体勢を低くした犬は、先ず最初に俺の右足へ噛み付こうと首を伸ばす

「くらえ！！」

後、三十センチで噛み付かれる距離。

その距離で俺は最後まで隠し持っていた一番でかく、僅かに尖った石を犬の額目掛け叩き付けた

ごきり

骨を砕く異様な感触と、キャインと泣き、痛みに転がる犬

「う……」

それは俺を怯ませる

「追撃じゃ剣之助！ 奴は魔犬、手負いになれば手に負えんぞ！！」

「だ、だけど……」

これ以上やったら死……

「ウウウウウ」

地獄から聞こえるような威嚇の声。そしてはつきりと判る憎しみの目  
犬はゆっくりと起き上がり、その形を変えた

「……………え？」

バキバキ

骨が軋み、強引に伸びる音

次にピシッと軽い音がする。肉が裂ける音だ

黒犬の手足、胴や顎が二回り以上大きくなる。

その異様な骨の成長に肉は追いつかず、間接や肋骨、顎の骨が肉  
から飛び出ていた

そして最後に上顎の牙二本が太く、長く伸びる。最終的な形。そ

れは昔何かで見たサーベルタイガーに近い

……………異形。

本当は薄々感じていた

昨日からの出来事は普通じゃ無いと

だけど不思議と気にならなかった。

それは実感が湧かなかつたからなのかも知れない

しかし今、俺の前にいるコイツは……

「ボサツとするでない、剣之助！ 来るぞ！！」

「ガアアアアア！！」

犬が吠えた

いや、あれはもう犬なんかじゃない

じゃあ何だ？ 知らねえよ

「避ける、剣之助！！」

叫ぶような凜の声に、固まっていた俺の身体は反応し、腰砕けにしゃがみ込んだ。

俺の喉を食い破ろうと飛び込んで来た犬は、俺の頭上を通過し、直ぐに着地する

「あ……ひ」

殺される？

「た、助け」

俺は掠れる声で助けを呼ぶ。

しかし、その声を聞く者は誰も居ない

「グウウウウウ」

苛立ちげに唸る犬。砂利を踏み分ける音が背後から聞こえた

「た、たすけ」

「ガア!!」

四つん這いになり、逃げようとした俺に犬が体当たりをする。

小学生の頃、自転車におもいきり跳ねられた時の記憶が蘇る

「あう!?!」

弾き飛ばされ、砂利道を転がる。身体のおちこちが痛んだ

「あ……い、痛……あぐ!?!」

身体を丸め、痛がる俺にずしりとした体重がのしかかる

「ハッハッハッハ」

興奮した鼻息と、顔に垂れる黄土色のよだれ。吐きそうなくらい強い獣臭

「あ、あ……」

首を捻り、見上げると怒りと食欲に燃える犬の目と目が合う

食われる？

恐怖で視界が涙で歪む

「や、やめ」

「ガアア！！」

「ひっ！？」

剥き出しの牙が、俺に迫る

そして

「ひ、ひい、ひいい！」

俺はシヨンベンを漏らした

「い、嫌だ、嫌だあ！！」

死にたくない、死にたくない、死にたくない

必死に叫び、喚く

だけど、誰も助けてくれない

飢えて死んでも、殴られて死んでも、食い殺されて死んだとしても

俺は汚いゴミと同等の価値だから

ゴミなんか誰も助かる筈が無い

「あ……………あはは」

何を勘違いしてたんだろう俺は

所詮、俺はヒーローなんかにはなれない。

ちょっと非日常的な事が起きたから、それに酔っただけなんだ

俺は只のホームレスだ。社会から逃げ続け、そのくせ不平不満ばかりを言う、ただの家無しだ

そう。俺はその程度の人間なんだよ

「……………に……………げろ……………逃げろ凜！！」

どうせ俺は此処で死ぬんだ。お前を逃がす事で、俺の人生に多少でも意味があったと勘違いさせて欲しい

俺は凜を逃がすべく、犬の身体にしがみついた

「逃げろ〜！！」

この一欠けらの勇気が続く間に。俺が生きている間に

「我は此処じゃ！ 馬鹿犬が！！」

蒼天の空に響き渡る勇ましき少女の声

犬はビクッと身体を震わせ、次にその声の主を見た

そこには腕を組み、仁王立ちで犬を見据える白装束の少女、凜の姿があった

「あ……な、なんで……なんで逃げないんだよ!？」

俺がせっかく囿になってやったのに。

これじゃ、やっぱり俺は只の役立たずで終わって……

「一蓮托生じゃ剣之助！ 我の命はおんしの命。おんしが死ねば我もまた死ぬ。なれば共に戦おうぞ!！」

単純明瞭。迷い無き言葉

凜にとって、俺の命はもはや自分の命と同様なのだ

会って間もない俺を何でそこまで信じて？

「何でだよ……」

何でそんなに他人を信じられるんだよ

「ウウウ」

目標を認めた犬の眼色は緑から赤へと変わり、そして主へ知らせるべく、遠吠えを……

「させるかよ!！」

のしかかられた状態から犬の面へ、右のフック

体勢がめちゃくちゃ悪いつてのに、俺の拳は犬の頬を間違いない砕き、数メートル先へ転がさせた

「……死にたくねえ、戦いたくねえ、傷付けたくねえよ！」

俺と犬は、殆ど同時に立ち上がる

「剣之助……」

「だけど、だけどやるしかねえんだろ！！」

バチバチッ！

叫んだ瞬間、右腕に皮膚が裂けたかと錯覚させる程の痛みが走った

「ぐっ!？」

思わず呻き声を漏らした俺は、自分の右腕を見る

その腕に走る紫色の電流

「キャン!？」

黒犬は怯え、本能に従い逃げ出そうとしたが、闘争を教え込まれた身体がそれを許さない

「ウ、ウウウウウ」

耳を下げ、尻尾を下げる黒犬。しかし、四肢に今まで以上の力を込め、俺に向き直った



「い、これは？」

その間にも、電流は俺の右腕に纏わり付き離れない

「……………っ！？ 喚べ剣之助！ それは雷纏う鬼の一太刀！！」

そう、それは懐かしき日々、懐かしき人の忘れ形見  
今こそ悠久たる時を越え、再びその名を喚ぼう

「紫雷、子烏丸一刀！！」

「紫雷、子烏丸一刀！！」

重なり合う声と共に、俺は右腕を何も無い空間に突き出し、握る

それと同時に全身に広がる雷の痛み

それは何の飾り気も無い黒く武骨な一刀を手にした証

俺はその刀を空間を鞘にし、思い切り引き抜いた

## 二章 5

ジジジジジジ

虫が集まる夜の電灯が出す不快音。刃も柄も黒い刀から、妖気のような紫雷が沸き立つ

「……………」

始めて見る刀。異様な事態

だが、何故か刀は良く手に馴染み、懐かしさを感じさせた

「……………久しぶり、小烏丸」

ブーンと刀が震える

「っ！ 挨拶は後じゃ、振るえ、剣之助！！」

「ああ」

大口を開け、喉元を指し飛び掛かる魔犬。

その速度は普通の犬を遥かに越えている

自然に、ごくごく自然に身体が動いた。流れる剣跡、左から右へ一本の紫線が走る

「ギッ！」

牙をかわした俺を飛び越え、地へと着地する魔犬

「うむ、見事じゃ！」

凜の賛辞と共に魔犬の頭は上半分が切り落ちる

「……………ありがとな、小鳥丸」

シュッと煙の様に大気に溶け、消える小鳥丸。そして……

ドサ

犬が倒れる音

「……………」

殺したんだな、俺は

「……………魔犬は望まぬ生を受け、その生が尽きる時まで利用される憐れな獣よ。死してようやく自由になれるのじゃ

剣之助。生物を殺したその痛み、忘れる必要は無い。だが、死んだ者の念を心に残してはいかんど。おんしは生きておるのじゃから」

……………。ありがとな、凜

「……………しっかし、何だったんだあの刀！？ てか、マジで眠っていた能力が目覚めやがった俺！」

「我は確信しておったぞコヤツならやれると」

「嘘つけ！」

軽口で自分をごまかす。ごまかさなければ、この身体の震えは止まりそうに無い

……怖い。刀や魔剣が、じゃない

余りにも現実的では無いここ何日間の異常に、不可解な自分自身。

その二つに対し、この期に及んでも、何の違和感を抱かない事が、凄く怖かった

「……この刀は小烏丸。鈴華が持つ刀の中で、最も身体への負担が掛からぬ物じゃ。」

恐らく私の身を案じた鈴華が、おんしに残したものじゃろう。そして我を救おうとするおんしの強い精神に、刀が応えた。

……今の我には力なき故、このような推測しか出来ぬ。……すまぬの剣之助、おんしの不安を晴らしてやれぬ」

凜は、すまなそうにそう言い、俺の前に来る

そして、俺の顔を見上げて言った

「助かったぞ、剣之助。ありがとう」

子供らしい、満面の笑顔で

### 第三章 修業とかぼりとか

「修業じゃ」

魔犬を倒し、小田原から急いで逃げ出した俺達。五日間殆ど休まず必死に移動し、ようやく着いた山梨県

「……… 天気が良いから富士山がよく見えるぜ」

担いだバックからする声を見無視して汗を拭く

「修業じゃ」

「……… あ、赤とんぼ。すっかり秋だなあ」

「修業じゃ」

「可愛く言われてもやりたく無いんだよ！ てか修業している場合じゃ無いだろ!？」

あれから追っ手は無く、腹が減る事以外は平穩無事に過ごして来たが、いつまた襲われるか判らない。

此処は古来から伝わる名言に則って、逃げるが勝ちなのだ

「我もそうするつもりだったのじゃが、おんしが戦える人間と判った今、

おんしを鍛えあげた方が生存率が高くなりそうじゃからの」

そう、凜の奴、この間から修業修業と煩い。

おかげで此処何日間か僅かな睡眠時間の前に腕立て伏せと腹筋をやらされる羽目になっていた

「あのね、俺は一般人ですよ？ ロープレとかなら『東の洞窟には怪物が一杯出るですよ』とか何とか言ってる程度の人間ですよ？」

「あれはあれで重要じゃろ？ いなければ目的地が判らぬ。そしておんしは村人Aでは無い」

「むう……」

確かにちよつと不思議な少年って感じではあるけど、基本はやっぱり一般へたれ人だ

「って言われても、あれ以来刀は出ないし……」

魔犬を倒した日以来、何度か召喚を試みてみたものの、刀が出る事は無かった。

それどころか刀の代わりに警察官を何度も召喚してしまう

まあ確かに夜中、河川敷や森の中で訳の判らない事を叫んでいる奴を見掛けたら、通報の一つや二つはするだろう

「と、言うわけで、やらん！」

腹筋と腕立て伏せも回数を減らす！

「ふむ、確かに召喚は出来なかった。しかし霊峰と呼ばれる場所ならば届くかも知れぬ」

凧はバックから指だけを出し、それを指差す

「富士じゃ。さあ剣之助よ、樹海にれつつい、じゃ」

「殺す気か!？」

二時間後

「やって来ました富士の樹海。今日は何をするのかな、オネエサン」

「うむ。刀の召喚を自然に出来る様にする為の実験じゃよケン坊」

結局やって来てしまった富士の樹海。

まだ昼頃なのだがほのかに薄暗く、鬱々と茂る草や弱々しく立つ不気味な木々と、妙な冷気のせいで気分は下降しっぱなし

「浅いとは言え、此処は既に幻世。虚し身は現し身へと変わり、その手に届こうぞ」

何を言っているんだコイツはって感じではあるがこれほど人が来ない場所も無いだろう。

此処は凧の言う通り、生き延びる為にせめて刀だけでも呼べる様にしておきたい

「……判った」

俺は目を閉じ、深呼吸をする

「うむ。まずは集中するのじゃ。そして刀の形を想いを温度を感じ

とれ」

「……………全く感じとれないのですけども」

「む……………なら勢いで行くか……………よし！ 気合いじゃ剣之助！ 猛る己の心が、その身に宿る力を呼び起こす！！ さあ、今こそ喚べい剣之助！ 闇より生じ、闇を裂く紫雷纏う烏の名を！！」

「お、おっしやー！！ 行くぜ、紫雷、子烏丸一刀！ 今こそ俺にその力を貸せい！！ うおりゃああああ……………」

反応が全く無い

「む……………雅が足りぬのかも？」

「紫電、子烏丸一刀！！ 出て来てたもれ」

シーン

「優しさが足りぬ」

「さあ子烏丸。恥ずかしがらずに出て来てたもれ？」

シーン

「うむ、やはり無理か」

「判ってるならやらせるなよー！」

恥ずかしい事させやがって！



「すまぬ、すまぬ。しかしあれじゃな。中々上手く行かぬものじゃな……ふふ」

「今、笑ったな！」

「笑つとらんよ？」

「いーや笑った！ 超馬鹿にした目で笑つたもんね！！」

「剣之助よ、それは己に自身を持たぬが為の被害妄想じゃ。

自身を持てい剣之助。おんしは我の命の恩人で勇気ある者。決して世に恥じる事無い勇者ぞ」

「そ、そうかな？」

クラゲから勇者にクラスチェンジ？

「だから笑われたぐらいでめげるで無い」

「結局笑ったんかい！」

### 三章 裏

私には身寄りが少なかった。両親とは私が産まれてすぐに死別し、兄弟もいない

親戚は何人かいるはずだったが、一度も会った事はない

産まれた時から一人。あの方に拾われるまで、ずっと一人

だから

だからとは言わない

だからとは言えない

私は、自分の意思であの方に仕えているのだから

六角邸

四国は香川の最北の片田舎。そこには敷地五百坪程の、純和風な屋敷がある

立派な鬼瓦の屋根に白壁。門は鋼鉄であり大きい

庭には鯪<sup>シマチ</sup>すら飼える大きな池があり、架かる石橋は朱と金に塗られ  
きらびやかだ

武家屋敷。

その表現が一番相応しいだろう屋敷

それが我等が主、十七代目の六角である、六角 静馬様しずまがおわす場所

「石兔、御前に参上致しました」

十畳ほどの狭い部屋。昼間だと言うのに明かりは無く、しかし、くすんだ雰囲気は無い

「首尾はどうだ、石兔」

若い張りは無く、凹凸も無い低い声がひざまづき頭くづかぶを垂れる私を呼ぶ。

その声の間に間に女の艶声が混じるが、止む事は無い

「ええ、はい、上々ですよ。現在、五本目まで抜き終わりました」

「流石は六角衆が筆頭、石兔。仕事が早い」

「光栄のしたり」

「だが手緩いな」

「は」

「二日だ。それで残りを抜け」

「はは」

二日。鈴華は強靱な精神の持ち主だ。残り二日で全ての刀を抜くとなるとかなり強引な手を使わなければならない

「頼りしておるぞ」

「……………はい」

釘を刺された。そう言っても良いだろう

私は六角様のお姿を見ぬよう立ち上がり、部屋を退室する

部屋からは、快樂に震える女の断末魔が聞こえた

## 三章 2

「いでよ、子烏丸!」

「……………」

「カムヒーヤ子烏丸!」

「……………」

「おいでませ〜子烏丸さま〜」

「……………ふう」

樹海に入って一時間。必死に呼び続けていたが、バックから聞こえる溜息で、テンション激落ち

「溜息付くなよ〜、空しくなるじゃんか」

「む……………すまんの、少し考え事しておった」

凜の声に陰が混じる

「……………あの赤い姉ちゃんの事か?」

「むう。とぼけた顔をしておるが、勘が冴えるのう剣之助は」

凜はからかう様な口調で明るく言った

……わざとらしいって

「今度から金田一って呼べよ。……さーと。修業を再開するか  
」！」

「うむ。我もおんしを見守っておるぞ剣之助」

「ああ！」

と、勢い良く頷いてみたものの、どうすれば良いか判らない  
てか叫ぶだけじゃ駄目なような……

「……何か良いアイデア無い？」

「ふむ？ ……前回、何故おんしが刀を喚べたのか、それが重要じ  
やな」

「前回ねえ」

あの時は、とにかく必死だったので良く覚えていない

「強き真つ直ぐな思いこそが刀を喚ぶ……か。

と、なると……あれじゃろうなあ」

凜は気の乗らない声で呟いた

「……言えよ。今の俺ならたいいていの事なら耐えられると思っぞ」

「うむう。……よし、判った！ 剣之助よ、死んでくれい！……」

「よしきた任せとけておいしい!？」

やはりそれが目的で樹海に!？」

「いや、言い方が悪かったの。そのぐらいの覚悟で挑めと言っ事じや」

「ならそう言えよ!」

しかし死ぬ覚悟か……

「うん、無理」

「うむ。ならば我を森の奥へ連れてゆけ」

「奥？」

もう結構奥なのだが

「なに大丈夫じゃ。富士の樹海など大袈裟な事を言いよるが、結局は只の森。奥に行こうとも人の出入りはあるし、方向が判らなくなる事も無い。直ぐに出れようぞ」

「そうなのか？」

「うむ」

自身満々な声だ

「奥に行けば刀を？」

「可能性は高まるじゃろっ」

「そうか……」

この先、何が起きるか判らない。例え使わなくても、あの刀は脅しになる

「オツケー、行こう。森の奥に」

「うむ……………ニヤリ」

「うっ？ ……な、なんか急に寒気が…………」

「気のせいじゃ」

「…………ま、いいか。んじゃ行くぞ〜」

俺はバックを担ぎ、樹海の更に奥へと向かった

そして歩く事、三十分

「…………凜さん？」

「なんじゃ？」

「なんだか木の形が変わってきたのですが？」



辺りは深い森で太陽が遮られ、先程より更に薄暗くなっている。  
木々は真っ直ぐ伸びている物が少なく、なんだか妙に曲がって生えている木が多い

「うむ、原始林じゃな。自然がそのまま残る、良い森じゃの」

「へえ……」

余裕のコメントだ、別に慌てる事でも無いらしい

「だけど歩き難いな、辺りも同じ景色が続いてるし、道はこれで合ってるのか？」

根っこや道の凹凸のせいで歩き難いし、谷のような場所も幾つかある為、真っ直ぐには歩けない。本当に俺は奥に向かっているのかどうかも判らない

……迷ってる？

「心配するでない、幻世は歩む毎に段々と深くなっておる。ちゃんと奥に向かっているわ」

「はあ……」

幻世ってのが何なのか全く判らんが、どうやらコンパスよりは頼りになるらしい

「まあ迷ってないなら別に……っ!? ……あ、あのう凜さん？」

あの木の高い所に硬い物で引っ掻いた様な変な傷跡があるのですが？」

「うむ、熊じゃろつな。恐らくはツキノワグマじゃろつ。あの高さだと、体長は160センチと言った所か。中々大きいのう」

「なるほど、すごいやオネエサン。それじゃそろそろ戻ろつか！」

「その前に一度下ろしてくれぬかの、剣之助」

「え？ あ、ああ良いけど……」

なるべく平らな所で静かにバツクを下ろす

「うむ。よつと」

掛け声と共に内側からチャックが開き、凧がバツクから出て来る

秋とは言え、蒸れるであろう狭いバツクの中。何日も居たと言うのに凧は疲れた顔一つしていない涼しげな顔だ

「お、おい。出て大丈夫なのか？」

「現世は幻世。幻世は隠世となりて、我の気配を臆げにする」

「……………はあ、なるほど」

「大丈夫じゃよ。さて、剣之助。今から我が直々に稽古をつけようぞ」

凧は両手を広げ、衣をなびかせながらフワッと一回転する。

森の中で踊る妖精みたいだ、等とは口が裂けても言わん。なぜな

らば

「鬼の鉄具。俗に言う鬼のこん棒じゃ」

右肩に本人よりもデカイ鉄のこん棒を軽々と担いでいるからだ!?

「いつの間に!?!」

「此処は幻世。力の大半を無くした我でもこのぐらいは出来る。さて、それではゆくぞ?」

ゆらりと俺に近付いて来る凜

「ど、どちらにです?」

ビビりながら尋ねる俺。そんな俺に凜は言う

「鬼が連れていく場所は一つ」

一度言葉を区切り、

「地獄じゃ」

ニッコリと蠱惑的な笑顔を見せながら!

### 三章 3

「では行くが……死んではならぬぞ」

「それはお前次第だろうが！」

文句を言うのとほぼ同時に、俺の前髪が散った。伸びて目に掛かるから邪魔だなと思っていたから丁度良い……

「……………ギャー!？」

五メートルは離れていた筈の凜。それなのに、こん棒がいきなり俺の目の前に現れ、横薙ぎされたのだ

「次は当てるぞ？」

目の前の凜が言い放つ

「そりゃ当たるわ！」

見えねえもん！

「死線を越えること、それこそが己を更なる高みへ導くのだ。

剣之助よ、次の一撃は今のおんしではかわせぬ一撃。生きただけの子烏丸で受け止めてみせい！」

凜は俺の頭上にこん棒を落とすべく、軽々と振りかざした

「や、やめ……やめー!」

「信じておるぞ」

凜は躊躇なくこん棒を俺の頭に振り下……………

「……………はれ？」

目が覚めると、木々の合間から僅かに見える空には、幾つもの小さな光が浮かんでいた

「……………夜か」

いつの間に寝たんだ俺は

「てか、さみー」

身体を起こし、周りを見回すと何故か森の中。なんでこんな所で寝て……………あつ！

「凜！ お前、俺を殺そうと……………凜？」

辺りには凜の姿が無く、からっぽの鞆だけがぽつんとあった

「凜？」

あいつ何処へ？ ……まさか誰かに連れて行かれた！？

「り、凜！…！」

がさがさ、がさがさ

凜を探そうと立ち上がった時、背後から草木が踏み荒らされる音が  
静かな森に響いた

「ん？ ……なんだ、近くに居たのか」

心配させやがって

「意地が悪いぞ、凜……さん？」

振り返ると黒くて逞しい素敵なお方

「……あらま随分毛深くなって」

「……………ウガ？」

「ギャアアアアア！？」

「っ！？ ゴアアアア！！」

俺の声に驚いたのか、凜？ は仁王立ちになり吠えた

「つて熊！？」

なんでやねん！ なんで熊やねん！？

「グウウウウ」

熊は警戒しながら近付いてきました。どうします？

1、死んだ振り

2、逃げましょう

3、仲間にしちゃえ

4、

「戦うのじゃ剣之助！」

「それがあつたか！ って無理に決まってるだろアホー！！」

熊の後ろから凜の声がした。姿は見えないが近くにいらしい

「こやつは飢えた人食いよ。戦わねば死ぬぞ！」

「ひ、人食い！？」

説明しよう。普通熊は人を恐れ、特別な理由が無ければ避けるが、一度でも人を食べた熊は、人を食料と見る為、恐れよりも食欲を取るのだ！

「なんて、誰に説明してるんだ俺は！？」

「剣之助、おんしに足りぬのは自信じゃ！ 自分を信じよ、魔犬を制したおんしはこやつよりも強い！！」

「無理だー！！」

逃げるしかねえ!!

「お前もさっさと逃げろー!」

熊は俺に集中している。今なら逃げられる筈!

「全く、おんしと言う男は……」

凜は呆れた声で呟く

「良いから早く逃げろ! 助けを呼べ!」

どわ

熊の直ぐ後で何かが倒れる音がし、熊が振り返る

「うわ、転んでしまったぞ。助けてほしいぞ」

凜!?

「な、なにやってんだよ!」

「喰われてしまっ」

なんてわざとらしさだ! だけど!!

「わ~~~~~!」

「っ!?!」



俺の大声で、熊は再びこっちへ注意を移す

「今だ凜！ 早く逃げ……」

「ゴオオオオオオ！！」

「……………えへ」

熊さんが立つたよ

「えへへへへ。私はちょうちょヒラヒラ舞うの……」

「馬鹿者！ 現実逃避している場合か！？ 戦うのじゃ剣之助！  
誰かを本当に救いたいならば、おのが力で救ってみせよ！！」

「ちょうちょ、ちょうちょ私はちょうちょ」

「誰かを……我を救ってくれ、剣之助！」

『私を救っておくれ、信正……』

「っ！？」

刹那、右腕に雷が走る

それは身体ではなく、心に痛みを感じさせた

「……………小烏丸」

雷を握り、闇夜の空間を鞘にその名の刀を抜く

「……………あれ？」

気付けば俺の目からは、涙が溢れていた

「やったの、剣之助！」

前の草むらから凧が顔に喜色を浮かべ、飛び出して来やがりました

「り、凧！ 危ないから下がっているー！」

「大丈夫じゃ、こやつは我らに危害を加えん。鬼と熊は太古からの友じゃて」

凧は熊の側に行き、身体を撫でる。すると……

「ぎゅ〜」

可愛く鳴いた！？

「そ、それじゃ、まさか……………」

「おんしにやる気を出させる為にひと芝居打ったと言っ訳じゃ。」  
「苦労じゃったな熊吉」

「ゴフ」

熊吉は頷き、のっしのっしと森の中へ…………

「って凧！ お前なあ」

「剣之助も良くやったの。褒美じゃ、我直々におんしの身体を癒してやるさ」

紅い唇に妖艶な笑みをうかべ、凜は甘い声でそう言い放った

### 三章 4

「どうじゃ剣之助。気持ち良いか？」

「あ……ううう」

「くく、そんな声を出しおって。ほれ、もっと熱くしてやろう。ふ  
〜、ふ〜」

「あう、あううう〜」

「くくく、だらし無く汁を垂らしよる。この際じゃ干からびるまで  
出してやろう」

「だ〜熱い〜!!」

森の中、ご褒美との事で凧はどこからか水の入ったドラム缶を持って来た

そして火を使い、ドラム缶風呂を用意してくれたのだが……

「いくらなんでも熱過ぎだ！ 火を弱めろ!!」

凧は穴の開いた竹で、ふーふーと火を噴くが、どうゆう原理か噴けば噴く程熱くなりやがる

「なんじゃだらし無い。将門は六十度を越える熱湯へ鼻歌まじりに入っていたぞ」

「そいつは不感症だ！」

「熱き湯は英気を養う。ほれ、ふーふー」

「熱っ！？ あち、あちいー！」

熱さに耐えられず、ドラム缶を飛び出した俺

「むっ……ふ」

「人の股間見て、鼻で笑うな〜！！」

「……来い、小烏丸」

軽く呟くと、周囲の空間がバチンと弾け、腕には紫色の雷が纏わり付く

そして、雷を握り抜くと全てが黒塗りの無骨な刀の姿

「うむ。完璧じゃ！」

「……なんだかどんどん現実世界と掛け離れて行く気がするな」

「世は全て夢、幻。現の実など何処にも無い。強いて言うならば、今を生きるこの時だけが、おんしの現実じゃ」

「……認めたくないものだな」

「カンタムは1stが一番好きじゃ」

「俺はセータって、これからどうするよ?」

森の中はすっかり暗くなっていて、周囲の僅かな部分しか見る事が出来ない

「我は夜目が効く。このぐらいなら大丈夫じゃが、もう夜も遅い。夜が明けてから行こう」

「そうだな。正直疲れたよ」

どかっと木の根っこに座り込むと、急に身体が怠くなって来た

「刀を何度も召喚したからの。ゆっくり休め剣之助」

凜は、いつになく俺を労るように言い、自分のバックを開ける

「この辺りは熊吉の縄張り故、我らに危害を加える者はおらんと思  
うが一応簡単な結界を張っておく。少しうるさくなってしまつが、  
すまぬの」

「ホームレスを舐めるなよ? 電車が近くを通つても安らかに眠  
れるぜ!」

「そうか。……ほれ、もそつと火の側に寄らんか。霊峰近き故、暗  
き場所は魍魎が集いやすい。下手をすると喰われてしまうぞ」

「……………」

無言で火の側に行く。震えてるのは寒いからさ

「冗談じゃ」

「面白く無いんだよ、凜の冗談は！」

「おかしいのう、義経などは大爆笑じゃったが」

笑う奴もセンス無さ過ぎる！

「ともかく森は冷える。寒くは無いか剣之助？ 風邪など引くでないぞ」

「……親かよ」

俺を気遣う凜の優しい声に、何だか妙に照れ臭くなり、俺は凜に背中を向けてふて寝をする

「ふふ、手が掛かる子じゃて。……さて、始めるとしよう」

世の境にあるは一月の、雨は空より語るは如月の、扱は我が内響く鐘の音。日陰にさきし一つ花。幽の現のまにまにかのうたうたふ

「……………」

鈴よりも更に澄み切った凜の声が、呪を歌う

それは子守唄よりも暖かで、優しさに包まれていた

「鬼……か」

こんな歌が歌える凜が鬼ならば、人の方がよほど鬼だ  
睡魔に吸い込まれながら、俺はぼんやりとそう思った



## 第四章 遭遇

チュン、チュンチュン

「……鳥の声で目覚めるってのは、やっぱり切ないな」

路上生活を始めてから、目覚ましといえば鳥の声だった

俺はよいしょと、身体を起こす。所々が痛い、我慢出来ない程ではない

「起きたかの、剣之助」

既に起きていて、空を見上げていた凜は、その視線を俺に向けて微笑む

「うっ！」

その微笑みに鼓動がワントempo早くなる。

いや気のせいだ、勘違いだ、俺はロリの人では無いのだ

「さ、さて、そろそろ行く準備をするかな」

「ん？ 顔が赤いが、風邪かいの？」

「だ、大丈夫、大丈夫！ それより今日は何処まで行く！？」

「む？ 変な男じゃの〜。……そうじゃな、今日は群馬に入りたい所じゃが……」

凜は言葉を区切り、思案する

「……………どうした？」

「新潟にある祠は、我すら存在を忘れていた程に廃れた祠じゃ。

よもやそこへ我らが目指しておるとは思つまいが、間の悪い事に群馬にも我の祠がある。恐らく六角どもは我がそこを目指していると思つておるじゃろつて」

「なら待ち伏せしているかも……所で凜は何で追われてるんだ？  
てか六角？」

おヤクザ様？

「元は鬼を狩る家じゃったが、江戸時代に入ると、徳川の為に鬼を使役する家になつた。その性質も武家から忍びへと変わり、徳川を影から護る最強の武術集団へと変わる、それが六角じゃ」

「……………へえ」

「特異な能力者達を集め、掛け合わせる事により更に特異で強靱な人を生み出す六角は、次第には鬼の力すら己の内に求める様になつた。じゃが、鬼の力は莫大じゃ、いくら人知を尽くそうとも人の身で有る限り制御する事など出来ぬ。

そこで六角は、自分らの能力を上げるのではなく、鬼の力を抑える事に着目したのじゃ」

「……………」

「むろん、それも容易な事ではない。何代も世代を重ね、失敗を繰り返した。じゃが、ある時一人の鬼が人間に恋をした。その鬼は……しかしあれじゃの。人に話を聞いておいて、舟を漕ぐおんしは中々良い度胸をしておるのう！」

ばーん

「あいたー!?!」

「もう話さん！ 行くぞ剣之助!!」

「あ、ああ」

## 四章 2

後片付けを終え、出発の準備は整った頃、凜がバックを開く

「我はバックに戻るが、此処から先は油断一つしてはならぬぞ？」

「はいはい」

「む。心配じゃの」

不安げな顔をしながら、バックに入っていく凜。なんだかシユールな風景だ

「大丈夫だつて。よつと」

バックのチャックを閉めて肩に担ぐと、ずしりとした重みが、肩に響く

「剣を出せる様になつても、強くはなつてないんだな」

「当たり前じゃ。一昼夜で強くなるなど、それこそ化け物じゃよ」

「まあなあ」

「もっとも、小烏丸を喚べるだけで普通とも言えぬがの」

普通じゃない……か。そりゃそうだな

「……ま、それはそれで置いといて。出発だ！」

「む」

バックを持ち直し、気合いを入れて俺は第一步を踏み出し……

「……………」

「どうしたのじゃ？」

「…………ど、どちらに行けば良いのでしょうか？」

朝でも夜でも樹海は樹海だ、似たような景色が広がるこの森から、俺の力では抜け出せそうにない

「むう。…………今、我はおんしの命を握っておるのじゃな。ふふふ」

「な、なんですか、その不審な笑い声は」

「右じゃ」

「超嘘くせー！」

二時間後

「はあはあ…………や、やっと抜けれた」

迷い、翻弄されつつようやく抜けた樹海。青い空が清々しいぜ

「我が指し示す道を、おんしが中々信じぬから、余計な時間を食っ

てしもうた」

「お前なあ……次は群馬か」

「うむ。六角共が我を待ち構えるとすれば、先ず群馬じゃろう」

「……群馬を避けて行くか？」

「我には、我を追う者と、待ち構える者がある。要するに挟み打ちの形じゃな。奴らも馬鹿ではない、時が経てば経つほど我らの痕跡は読まれ、迫まれ、遂には身動き取れなくなるじゃろう」

「……………」

「我らに取って有利なポイントは、奴らは我が群馬にある祠を目指していると思っておる所。なればその穴についてやるのじゃ」

「穴、ねえ」

「とにかくにも、急いで群馬に向かってくれぬかの？ 着いた後の事は我に任せよ」

「あいよ、姫様」

「うづむぐ、やはりサブリボが出るのう」

バックの中から聞こえる掻き音に苦笑いしつつ、俺は群馬を目指し歩き始めた

## 四章 3

さて群馬。道は判らないが、とにかく進路表示板を見ながら北上すれば着く筈だ……多分

「……電車が使えば早いんだけどな」

しかし金が無い。財布の中は、なんだかんだでもう残り千円。俺にどうしろと言うのだ神様は

「今更じゃが電車は駄目ぞ。道筋が限られてしまう」

「……何だか逃亡犯みたいだよな」

「車、自転車等も一長一短じゃ。結局の所、歩きが一番じゃよ。速度こそ遅いが、応用が利くのでな。……我は捕まる訳にはいかないのじゃ」

「……そうだな」

未だに状況を飲み込めていないが、凜が変な奴らに追われているのは確かなのだろう。なら慎重過ぎると言う事は無い

「よし、じゃ頑張って行くか！ な、凜」

「うむ。おんしには大変な負担と苦勞を掛けてしまっが……頼むぞ、剣之助。全てが終わりにし時には、我はおんしが望む物全てを用意すると約束しよう」

「ガキがつまらない事言うなって。んじゃ少し走るから気をつけるよ」

「……ガキでは無いと言うのに。祠に着いた時が楽しみじゃ」

意味ありげに言い、凜は静かになる。どうやらお忍びモードに入っ  
たらしい

「……ふ〜」

吐く息も、すっかり白くなったな。肩に掛かる重みと共に、結構身  
体に響くよ

……全部終わったら、頑張ったな俺って思えるよな、きつと

「ダッシュ行くぜ〜！」

今まで一度も頑張って来なかった分、頑張ろうぜ俺！

走って、休んで、歩いて走って

夢中になって群馬を目指す

昼飯を取る時間も惜しく、100均で買ったコーヒー牛乳で済まし、  
凜用のおにぎりと茶をバッグへ適当に放り込む

「ぬ!?!? む! ……む〜」



とにかく急いだ。凜は俺に急げとは言わないが、バッグ越しに感じる焦りが、俺を急がせた。しかし……

「……まだ山梨から出れないか」

夕方になり、空は沈み始めているが、まだ山梨県から抜け出せない何とか今日中に群馬へ入っておきたい。ピリピリ痛む足の裏を無視し、俺は小走りをする

「……剣之助。今日は此処までじゃ、寝床を探してくれんかの」

「まだ行けるって。もう少し行こうぜ」

夜通し行けば、なんとか着くだろう

「もう我は疲れた。はよ休ませい」

「だけどよ」

「……おんしが倒れたら元も子も無いじゃろって」

俺に聞こえない程の小声で凜は、ぼそりと呟く

「凜？」

「えい、早く休ませんか！ 森じゃ、森を探すのじゃー！ー」

「あ、ああ、判った」

水を差されてしまった感じだが、現金なもので休むと決まるとホッと  
とする

「じゃ市外地の方に行ってみつか」

良い寝床がありや良いけどな

「んじゃ、今日は此処にするか」

寝床は割と直ぐに見付かった。市内から少し歩いた所に、河川敷があつたのだ。そこに架かる橋の下に近付くコンビニで大量に貰つて来たダンボールをひいて、腰を下ろす

「ふー。今日は疲れたな凜」

「こら、開けるでない」

横に置いたバッグのファスナーを開けようとすると、凜に止められる

「こらには結界が張れぬ。このままバッグの中で良い」

「そうなのか？ じゃ場所を変えよう」

痛む身体に、よっこいしょっと声を掛け立ち上がる。歳かな……

「無理をするな剣之介。はよう休め。我ももう動かされたくない、

酔ってしもつた」

「…………大丈夫か？」

「うむ。寒空の下じゃ、おんしこそ身体を壊さぬようにな」

「俺にはダンボールがあるからよ！ んじゃおやすみ」

「うむ。おやすみじゃ」

バッグにダンボールを掛け、俺もダンボールを被る。中々暖かいぜしかし明日からどうするべかな、金。本人確認がない日払いとかないだろうか？

ギョルルルル

「……………」

腹減ったなあ

キュルル

「……………つ、釣られてしもつたではないか！」

「す、すまん……………はあ」

どっか賞金付きの大食い店とかあればなあ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0373i/>

---

二人の鬼姫

2011年8月10日12時00分発行